

父の頭に、藁屑が、付いて居るのを、其子が見つけ、あわて、うアレ父様の頭に、お布圍が取付て居るよ」と云ひました。

信州松代の手毬歌

石坂よし

▲一や二ーみいやよー。よめよめ吉田の千本柳に雀が三疋とーまつて、一羽の雀は嫁入なざる、二羽の雀はひこ入なざる、三羽の雀は、酒買に行くとして、鷹におはれて、あれやボン〜これやボン〜。ぢ、ば、一寸来て一寸かくせ、まづ〜一買貸し申した。

▲ざん〜ざん〜〜くだ〜梅の花、こゝでお一つお手ばたき。

▲お輕は二階でのべ鏡椽の下では小野九太夫、主

人の退夜にたごさかな。おさかなとる猫どろぼう猫、やつと山猫さんしよ猫、やわとせやつとさのせ。



八月の天地

摩訶生

午後二時前後、寒暖計は常に九十三四度を昇降す、涼い哉…心の置き方によりては。氷を飲みて暑を凌ぐ國民は懦弱の國民に非ずば野蠻人の仲間なり。寧ろ鐵瓶の蒸氣のシユン〜たる傍、白湯一杯を傾けむものに與せん哉、心氣爽然として、

さながら白熊の棲へる北氷洋の氷山上に遊ぶ心地やせむ。

炎威赫々たり、盛なる哉彼の蟬や、椎の大木にすがりて聲張り上げて歌ふなり、中には經文を讀むが如く念佛を唱ふるが如き悟入せるものあり。

水田の間、鮎の兒供の尋常三年生一隊は列をなして清流の溝を進み、清流の邊、翡翠は、杭に止つて頻に水中を窺ふ。

夏の空、際涯なき蒼海の如く澄み渡りて藍よりも青し。此蒼

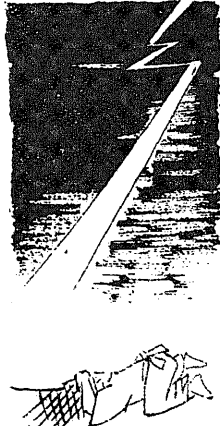
空の一端にフ

リくと眞綿

の如く雪の如

き夏雲は起る

その沸き出で、峭しき嶽となり、凄まじき谿とな



り、涼しき濱となり、勇ましき磯となりて、押し寄せ来る千變萬化、愈出で、趣愈深し。

ともすれば其谷間より僅に現れし薄墨色の雲、頓て火口の如き黒雲となり、忽ち起る一陣の驟雨に、我劣らじと霹靂一聲、天柱挫け地軸も折れよと鳴りはためきたる性急の雷に、平生の自稱豪傑が荒膽潰されて慌てふためき蚊帳の中に、頭かくして尻残したる最もをかし。

驟雨收まり雷去りて、夕陽の光は森を射て、霑へる綠葉に輝きうるはしき七色の虹を東の空に現しつゝやがて静かに五色の雲の中に没す。

軒の葱草に風鈴に、松風の音涼しく、蝙蝠出て得意氣に翔る。

廿日は陰曆七月七日、七夕に星の祭をなす、仰げば廣し大空や、偉人の胸の中の如し。

夜の火、殊に面白し、岐阜提灯の光、蚊遣り火
 鵜飼舟の篝、飛んで火に入る夏の蟲なかくに憐
 なり。

曉の空、星のまばらなるに池の蓮は濁に染まず
 軽くも笑ふ聲すなり、見よサワ／＼と運動かす水
 龜を、慙しげにヨチ／＼と半は泳ぎ半は歩み逃げ
 行く後姿は可笑けれど、エライものなり朝寢坊
 に非ず。

露のひぬ間の朝顔はなよやかに愛すべく、晝顔
 の小さくて元氣なる、夕顔の白くわやしげなる、
 鳳仙花の何だかボンヤリしたる、秋海棠の可愛
 げに、馬棘の紫の花の小じまりなる、曇毬栗頭
 の千日紅の健かなる、百日紅の唇動き、夾竹桃の
 何となく元祿時代の美人の儂ある、李の實の白天
 に照されて丸顔を眞赤にしたるは最も氣の毒なり

笠わらば貸さんといひたさまでに。

顔黒けれど心の紅き西瓜は村外れの畑に座して
 劉備の三顧を待つ如く。柚木の住むてふ山奥の低
 き茅屋根に這ひ上りたる蔓の中程に頑然と尻を据
 たる南瓜の、何を意張るにや癩くれだちたるいと
 をかし。絲瓜の宙にぶらりと平氣なる、されど筋
 骨の役に立つべきところは瓜類の柳下惠ともいふ
 べきか、白瓜、菜瓜、越瓜、甜瓜、亞弗利加土人
 の親類内なる長茄子圓茄子皆熟す。
 秋來ぬと目にはさやかに見えぬとも風の色にぞ
 驚かれ、夜はふけて、おはれに蟲の泣く聲きこえ
 始め二百二十日は近きぬ、雄々しき疾風は將さに
 起らむとす。

千代尼の夏季の俳句

蓼川 生

「其の名あまねく天が下に聞えければ、不知火のつくし人も、鳥が啼あづま人も、この尼の風流を、したのはぬはなき世とはなりけらし。」と、したはれ、あるは、「今や、馬の口とる男の子、蠶養ふ賤の女が、千代尼の句々ともてはやして、おのづから、喜怒哀樂の示しともなりぬ。」と、もてはやされしこの稀世の女流文學者の事蹟は、人々のあまねく知れるところなれば、ここにはいはず。「千代尼發句集」より夏季にかゝれるもの若干を抄出して

一服の清涼劑となさん。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

とは、これ、千代尼が始めて俳人盧元坊に謁して教を請ひけるとき、沈吟曉に達して得たりしとこ

ろ。その折、盧元坊大に嘆賞して、いひけらく、「是なり、是なり、以て止まずんば、終に其の堂に至らん」と。俳句の妙訣を悟りし千代は、常にこのころを失はざりき。雲井に名のる時鳥の句は、やがて、彼れが後日俳壇に高名をあげし端緒なりけり。

九十の春光既に過ぎ、暑氣やうやく生じ、更衣の節ともなれば、

二日三日身の添ひかねる袷かな

の句あり。平凡の事ながら、よく實際を道破せり。

おほかたの花の散り果てし後に、ゆかりの色ゆかしく咲き出づる藤花を見ては、

藤の花ながうてつれにおくれけり

地にとどく願ひはやすし藤の花と歌へり。着想頗るめづらし。

豊艶ほうたんにして、富貴ふうきの花はなと稱しょうせられ、初夏しゅがの庭園ていゐんに風情ふうせいを添そふる牡丹ぼたんにつきて。

てふてふの夫婦ふうふねあまる牡丹ぼたんかな

と、蝴蝶ことうを添そへて形容けいようしたる手際てぎわ、韻致いんち生動せいどうの趣おもむき

ありとやいはまし。

竹の子たけのこやその日ひのうちうちにひとり立た

姫百合ひめゆりや姿見すがたみをする子供こどもから

土見つちみれば限かぎなしとや百合ゆりの花はな

いづれも、おもしろがらぬはなし。殊ことに、最後さいごの

句く、百合ゆりの花はなの下向したむけるを見出みだし、無心むしんを化くわして

有情うじやうとなし、教訓きょうくんの意いさへ寓くうしたるは、諷誦ふうじゆ幾いく

回くわいして厭あかず。

花はなと針はりの心問こころをたずひたさいばらかな

の如ごときは、何なんぞ其そのの觀察くわんさつの奇警きけいにして、雋永しゆんゑいの味あじ

に富とめるや。

朝顔あさがおにつるべとられてもらひ水みづ

は、最ももつと人口じんこうに膾炙くわいじせるもの。早曉そうぎやう起き來きたれば、

殘月ざんげつ夢ゆめの如ごとく、涼氣りやうき肌はだにかなふ。朝あさ水みづ

井端いまたに立ち寄よれば、夜よの間にのびし朝顔あさがおの蔓つるは、

つるべにまといのぼり、星ほしとも見みゆる花はなしほらし

くも咲さき出でてたり、さすがに、心こころなくとりはなさ

んには忍しのびかね、もらひ水みづしてすませたる、溫藉おんせき

優雅ゆうがの氣象きしやう言外げんがいに溢あふれ、餘情じよじやう派々ぱぱたるを覺おぼふ。

千代ちよが幼時まうじの作さくに、

いふまいとおもへど今日けふの暑あつかな

の句くあり、他奇たきなき常事じやうじなれど、人ひとの言いはんと欲ほつ

して、未だいまだ言いはざるもの。されど、

動うごかして見みれど竹たけにもあつさかな

晚鐘ゑんしゆに散ちり残りのこりたるあつさかな

あつき日ひや指さもさ、れぬ紅鳥べにとり

の數句は、更に一段の趣致あり。

涼さや氷室の雫くより

松風もおのがものにして蟬の聲

涼さやあるほど出して驚の首

誦し來れば、炎熱の境にありても清涼の氣頓に人を襲ふ。

紅さいた口もわするる清水かな

に至つては、いはゆる一句人を涼殺するのみならず、女性の細心溫雅自らわらはれて、到底男子の想ひ到らざる所なり。余は、最も此の句を愛す。

なほ擧ぐべきもの多かれど、俳句の短かさに困みて、ここに止めつ。

(完)

とんぼつり今日ほどこまで行つたやら (千代尼)

女監を見る

溼 生

工場を出づれば軒下に立ちて大釜にて糊炊く者二人地に伏して禮す、毎日斯く炊かざれば供給にこと缺くよし例のいふ、此處を過ぐれば則ち洗濯場なり。此處にも亦た十五六人、一人の看守の指圖にて例の禮終りてうつむきて大の盥を擁ぐが如くに蹲りて襪せにあせにし例の衣を洗ふさま、われは再び視るに忍びず、一瞥して過ぎ、轉じて物置監に赴く。

房の東に孤立せる一小暗室あり、唯見る、光の通ずべきところは辛うじて隻手を容るゝばかりの小孔のみなるを、謂ふ此室は特にねぢけにたいのわざにては實を語らず命に従はぬ者はいましめ置

きて反省せしむる爲に設けたる其名も「獨謹室」と

いふと、所謂小孔は内なる囚徒に食を給する差入口にして之を閉づれば全く暗黒の室となるなり。

拘置監房に至る、年若き女の竊盜故買の嫌疑にて丈長き黒髮ふり亂して俯伏して泣き居たるあり、そも此處に泣き悔まぬ先きに己が爲さむとする事の正邪のけじめはつかざりしか、聞けば此女の父も母も兄も姉も皆此獄内の厄介者となり居ると、さてもむつかしきは盗みといふ遺傳性の病なり、あはれ此病を根治する術なきものによ、未決囚は此日この一人のみ。

右の房より續きて第二第三第四と順次に皆一房に一人宛静座せり、看守長徐ろに語りける「此處は満期出獄前の囚徒を一週間單獨に拘置して以て他囚と隔離する處なり」と、他囚の傳言をなし若

くは萬一内外の連絡をつけぬにもあらじとの懸念より斯くはするらし、第五第六第七と過ぎ行かむとするに白衣着て袈裟かけたる教誨師の窓近く寄りて何事をか懇に内なる者に説き聞かするあり、視れば内には三十あまりの女の乳呑兒を抱きて泣きつゝあるなり、一行約したるが如く足を止めて眼をむけたるまゝ、耳をばだてたるもことわりなり、われは「この阿魔女愚の智慧が今やうゝまはり來りしか」と獨り歩を轉せしかども何となく寒き心地せしに、更に驚けり、第九の房にて復又生れて一ケ年半ばかりなるが親なる者の膝を離れて鐵の格子にすがり居たるには、彼兒は實に此獄内にうぶ聲あけて今日に至るまで外界のものとして唯鐵窓の外僅に方二三間の内に現るゝ時々いましめの爲に來る看守の影と教誨師の顔とを見るの



だに斯くあるものを、現に己が婉ちし罪なき此可憐兒をして斯かる憂き目をうれしげに過さしめわ
 る此親の無慈悲極まる畜生なるよ。
 これにて女監の全體を略ぼ參觀し終る。
 監内は満目總て之を慘憺悽愴の光景のみ、觀來りて唯思ふ、彼等は如何でか終生世の常の人たるを得べきと、げに彼等は社會の厄介者なり、番に

みなりといふ、されば我等の過ぐるを見て人珍しげに無邪氣にうち笑み居たるなり、此處に至りて強情なるわれすら久しく視ることを得ざり

厄介者たるのみならず、誠に社會の蠹賊なり、見よ、見よ彼等の今日ある以前を。
 彼等の中には自ら勞せずして竊に他人の辛苦艱難して積みし財寶を盗みし者あり、正しき商賈の薄利なるによりて贓品の賣買をなして榮耀を貪りし者あり、慾を恣にしたる果は墮胎をなしたる者あり又なさしめたる者あり、嫉妬其他の原因によりて刃を以て人を傷けし者あり甚だしきは放火したる者あり、暮の鴉の時々に急ぐ頃、病めたる母の藥を醫家より携へ歸る可憐の少女の袷を剝ぎ取りし者あるに非ずや、殊に甚だしきは深更夢穩なる良民の枕を蹴つて之が財寶を強奪し果ては之を一揮の刃にかけひとしたる夜叉あるに非ずや、陽はに好意を表して食を其姑にすゝめて毒殺を謀りし青鬼あるに非ずや、つのにつのにたつたる邪慳

の絆を以て、飢ゑてこゝえて告ぐるに人なく唯亡
 き母の位牌にぬかづきて泣き沈める先妻の子を絞
 め殺したる餓鬼あるに非ずや。

之を思ひ彼を思へば、われは彼等の肉を多くり
 骨を碎き肝を裂き腸を蹂躪するとも尚ほ且つ慊
 ざる感あるなり。

さるに彼等が現に恙なく生存へ居るを得るは、
 何ぞ報施の倒なる、天は果して何の必要ありてし
 かく彼等と遇するの寛大なる。

禁ずべからざる此憤慨の中に忽焉として溢れ來
 りしは、何ぞ圖らむ、我涙ならむとは。されど我
 意志は笑ひて長堤を築きて之を堰き止めぬ。

此時、われは既に内より第四第三の門を外に出
 でて、もとの高柵の外なる獄内の通路に立てり。

(未完)

松嶋案内

香園女史

名勝の地は澤山ありますけれども、四季の眺絶
 えませんのは松島に及ぶものはありますまい、雨
 の日も、晴の日も。霞の朝も、月の夜も、何時も
 眺がよいものですから、名工も其眞の景色を畫く
 ことが出来ないとはいふて筆を擲たとかいふ話も
 あります。

松島は仙臺を距ること七里、東京よりは百里餘
 です、併百里と申しても、瀛車で參れば十三時間
 餘にて行きつきます、朝の五時に上野を出ますと
 其日の午後五時三十分には仙臺につきますここに
 乗り換えまして午後六時十分發の瀛車にて鹽釜へ
 まゐりまして此所にて一泊し翌朝船にて松島へ參

るのです。

鹽釜には有名なる鹽釜神社があります、祭神は

岐神即鹽土翁と申しまして、始めて鹽を煮ること
を教しへたと申す方です、神籠は今に残りて居り

まして御竈社と申し祭りてあります、又安産の神
と申して遠國から參る人が澤山あります。鹽釜よ

り松島までは海上三里、いふにいはいはれぬよき景色
で其間に見ゆる島はいくつありますか、數へされ

ないほどあります、實に送り迎ふる暇がないの
です、島の形は種々面白いのがありまして、皆名

の如く松が生ひ茂りて居りますが、只一つ裸島と
いふ島ばかりは、一本の松もありませぬ島には種々

の名があります、即 昆沙門島、惠比壽島、筈島
布袋島、牡丹餅島、屏風島、龜子島、宰相島 五

大堂、蛇島、帝島、天女島、雄島、などであつて、

其ほかにも澤山の島があります、かく青々と松の
茂りた島の間を廻るは誠に愉快です、船と申して
も屋形船は少く、大抵屋根なき船で、一艘に七八
人位乗れるのです、若し釣の出来る人ならば釣針
を用意して參りますのも亦一しほの樂みでござい
ます。

鹽釜の浦續きに扇溪と申す處があります、大
層景色のよろしい處です、此所は山が左右に分れ
て、其間に一の鷗沙灣を抱いて居ります、それが恰
度扇をひらいた様ですから、所の名となつたそう
です。其山の上には海無量寺といふ寺院がありま
したが、五六年前に焼けまして、今は少なき庵を
残すのみでございしますが、此所より松島灣を見下
すときは實に繪にかいた様です。

再船に乗りますと僅かにして、松島の波止場

につきます、灣内は波穩に目にうつる所の景色は千態萬狀自ら畫中の人となるのでございますから、實にたのしい面白いわけて日本三景のひと稱するももつともでございます。

此地に主なる旅館は觀月樓、松島館、加賀三、鈴木屋等ですが、觀月樓は中央の最よき位置を占め、客室も多く、眺望も亦宜し、觀月樓より半丁許参りますと、瑞嚴寺とて、有名なるお寺があり、昔は松島寺といひし者のよし、慶長五年伊達政宗公紀伊の熊野より材をとり建立せしめられしものと傳へて居ります、寺内には政宗公環甲の像、及澤山の重寶珍器を陳列し誰人でも縦覧が出来ます、瑞嚴寺の南一丁許觀月崎といふ所に觀瀾亭があります、これは昔仙臺藩主伊達家の別邸にて月見の御殿といつたさうです、もと政宗公が

伏見桃山の亭を賜はりたるものを江戸に移し、後再此地に移されしものと申しますが柱は柂をもつてつくり、觀月に最もよき所でございます。此所より數丁隔りて雄島といふ島がありまして、渡月橋といふ橋があります、島の周圍には多くの岩洞がありまして、昔僧侶の座禪した所だといふて居ります、島上にも座禪堂があります。

再もとまひりました道に戻り觀月樓の前を通り少し参りますと、五大堂と申す島がわりまして、二の橋が架けてありまして、其橋は梯の様になりて居りますから、透橋と申します。

此地より松島停車場までは三十町あります、其途中より富山といふ所に立ち寄るときは、松島の大景を一目に見ることが出来ます、富山は松島の東北一里半の處にありまして山上には大仰寺がわ

ります、ここより八百八島あるといふ松島の全景を眼下に見おろし遠きは靈山金華山等を眺め白帆を張りたる漁船は其間に見え隠して實に絶景といふの外はありませぬ。

此所を見終りて松島の停車場より汽車に乗りて歸るのです仙臺には僅に四十分にて着きます若し直ちに東京にかへらんと思はゞ青森上野直行の瀧車に乗れば僅に十四時間許にて歸られます、まだごらんにならない御方も御ありになりますならば避暑かたぐ、此絶景を御覧になることをおすゝめ致します。

俚俗總領のじんろくと云

ふことに付きての所感

秋山七朗

世俗に總領の甚六と申す俚諺あり。抑々此總領の甚六と申す語は、何れの時代、如何なる原因に由來せしかを知らず、然れども古來我國に行はれたる俚諺にして、其意味は此處に明言する能はずといへども、一般には總領は劣等なる者との意に外ならざるべし。即總領の子は他の兄弟姉妹中最劣等なることを表出せるものなるべし。果して此の如きや否やは明ならずといへども、然し全然無根のことを顯せるにてもあらざるべく若し不幸にして全く、事實なりとせば、國家の爲實に容易ならざることにして深く吾人の研究すべき

所のものたるべし。

蓋し所謂總領なるものは、即一家の長子にして

即一家の後繼者なり 國家の盛衰消長は即

又一家私人の盛衰消長に關係すとすれば、若し

一家の後繼者即總領にして 悉く甚六なりんに

は、其影響する所まことに多大なりといはざるべ

からず。余は或は世の識者諸君より敢て好奇皮想

の譏を免るゝ能はざるを怖るといへども、聊か隣

學上教育上より、此ことに付きて考究し、以て

識者諸君の教を乞はんと欲す。

總領が敢て甚六と稱せらるゝに至るに付ては、

余は、次に三要項を擧げて其原因となさんと欲す、

一、早婚の弊、其第一の原因としては、余は我

國目下の弊風たる早婚の弊に歸せんとす。之を統

計に見るに、世界文明國中、我國は最早婚の惡

弊あり、今次に各國男女の結婚年齢の平均を見

蓋し思半に過ぎん。

瑞西 男、三十一年一ヶ月
女、二十八年三ヶ月

米國 男、三十年九ヶ月
女、二十八年

英國 男、二十八年七ヶ月
女、二十五年五ヶ月

露國 男、二十五年二ヶ月
女、二十一年五ヶ月

日本 男、二十二年一ヶ月
女、十九年四ヶ月

即瑞西は、結婚の年齢最後くして、我國は最も早婚の國なり。早婚が其父母及子供に及ぼす生理上精神上の禍害の實に恐るべきものたるとは、

今日之を贅言するの要なし。

二二。第二の原因は母たるものが育兒教育上十分の觀念經驗なくして母となり子を育すること之なり。

蓋し今日の婦人たる者、學校に於て諸種の學問は授けらるゝなるべし、然れ共將來母となるに必要缺くべからざる兒童其もの、智識を有せず、育兒に付きての十分なる經驗を有せず、家庭教育の要を知悉せず而して互に相婚して、其子を育す。是を以て、其間に生れたる子供は、此年著き經驗不十分なる、育兒教育の不完全なる母に由りて育せらる。甚六たらざらんと欲すといへども得べけんや、即母たる人は其前に當りて遂に育兒に關する觀念を有せず、かくて出て、人に嫁し、やがて實地の取扱をなす、子供の取扱に付きて粗漏

不完全なる間違の生ずるは、毫も疑なき事なり。此の如くにして、長男は不幸にも母の犠牲に供せられ遂に精神上、若くは肉體上に、不幸なる一生不可療の缺陷を生ずるに至るなり。

三、愛情の過ぐるること。始めて生れたる子供の如何に可愛きは、經驗せる人の熟知せる所なり、長男はかくて、掌中の珠とも愛でられ、はやされて父母の熱愛するとも一方ならず、子を育することの面倒なるとも此愛情の爲めに打ち消されて、少しの苦勞をも覺えずして保育す。かくて此愛情の過ぐる結果は、即醫學上教育、上守らざるべからざる法則を破りて、顧みざるに至る。醫より注文すること、之が爲めに等閑に附せられ、學校より注文すること、之が爲めに家庭には守られず、此の如くにして長男は遂に其父母より真正の

教育を誤せらるゝに至るものなり。

以上の三原因よりして、通常長男は其心身の發達上必ず、他の弟妹等に劣るに至るなるべし。故に學校幼稚園等に於て、兄弟併び來る様なる場合に於て其二者の發達を注意觀察する時は、其發達の度に於て必ず、多少の差異を發見するに至らん。

要するに、家庭の教育は實に教育の基礎根本にして、家庭教育の完全なるものは、既に幼稚園或は學校に入學せる時に當りて其發達の異なるを見るべし。從來本邦婦人の多くは、此大切なる務を覺らず、從つて兒童に付きて研究することを知らず又、其機會をも得ざりしは、是非なき事なりといへども今日に於ては多少其機會をも得るに至り、現に余は過日來主唱して母の會なるものをも組織

せり。

前述の如き俚諺が、尙後來とても、行はるゝ様にては、我國の將來甚歎息すべき事なるべければ願くは、之を防がんが爲め、婦人諸君に於ては、女學校等に於て十分育兒の方法を研究せられ、育兒の智識なくば嫁すると能はざるは尙今日嫁入の衣類なくして嫁すること能はざるが如くに至らんことを切望に堪えず。

此一篇過般常會の席上秋山國手の演説せられたる大要を筆記せるもの、文字の誤りは筆者の責なり。

時論抄錄

抄錄子

●女子に運動を奨勵すべし

我國國民は體軀の短

少と身體の虛弱を以て世界に有名なり、其原因は

衣食住の不完全なるにあれども、また大に運動の

不足にもよる、就中女子には其弊最多し、英國

にては、女子に體操を強制せしより數十年身長を

加へたる事少からずといふ、又以て我等も失望す

る事なく勉むべきなり、遊戯と體操は女子の優美

の天性を傷ふといふ者あれど決して然らず、スベ

ンサー氏曰活潑なる遊戯は、成長後男子をして紳

士たるを妨げずとせば、女子をして貴婦人たるに

妨げありとはいかなる理由ありて云ふか……

(女子の友九十四號 勝又鄭二郎)

●女子の體育に就きて 當今女子の體育は、も

はや懸念するに及ぶまじき程進歩せり。寧風潮に

乘じて却りて中道を逸するなきやの恐あり。學校

時代に於て女子の體育進歩の度高き程、少婦時代

となりての苦痛の度高し、昔氣質の舅姑の傍にて

俄かに封建時代の行儀作法を課せらるゝは如何に

苦しからん、完全の良法にはあらねど、已む無く

んば左の法によるべきか。

(一) 學校體育の勵獎は家庭の狀態を考究して、其

間の餘り隔らぬ様徐にすゝむべきこと。

(二) 父兄をして學校の方針と家庭と密接の關係を

有する様注意せしめ運動外出等を適宜にし、夕

食後は家族團樂して體育に裨益ある遊戯をなさし

むること。(日本婦人第二十號)

●女教師優待論 女子は柔順、慎密、親切、愛

嬌、等先天的教師に適當なる性質を備へ居れば、

幼年の學校には是非必要なり、然るを悲しき事に

は世人の女教師を歡迎する理由此處にあらざ、其

俸給の低きによる、當世の紳士醜業婦を落籍する

ために莫大の金を投ずるものあれど、子を教育す
 る事を知りて比較的完全なる女子となり得し女教
 師を妻に迎へんとする者なし、賤しむべき醜業婦
 は氏なくて玉の輿にのり、尊ぶべき女教師は身分
 ある紳士の所に行かれず、さりとして車夫馬丁の許
 にも嫁かれず、あたら盛の花も見る人なしに春を
 過すもの多し余は世の紳士に女教師を妻とせられ
 ん事を希望す。(姫百合 第三第六號 澁谷馬頭)

●女子の職業に就いて 凡女子の働くべき場所
 は、家内に在つて、戸外にあらざ、消費に在つて
 生産にあらざ。現時各國の工場に女子の労働者多
 く、將來益々多きを加へんとす、多數の女子を家
 庭以外の業務に使用するは利ありて害なきか、女
 子と男子とは天性同じからず、身體の組織及び知
 力に大差異あり、また女子は感情に富み事物に感

動せらるゝ事男子より多し、例へば猛烈なる器械
 の音も、男子には左程感動を予へねど、女子には
 激しき感動を予ふ、其他大きな差異は分婉の一
 大任務なり、斯くの如く差異ある男子と男子とを
 同じ職業に使用するは如何なる結果を生ずるか憂
 ふべきことなり。(おんな 第六號 添田壽一)



●華族女學校卒業式 同校は先月十日を以て終
 業式舉行、同十三日卒業式を舉行せられたり。同
 日 皇后陛下には、高倉典侍の御倍乘、香川大夫、
 山内亮、田中式部官の供奉にて臨御あらせらる。